

緑り川

令和三年六月二十三日
作詞 大中臣正比呂

(一)

雪室ゆきむろに 外陽そとひあふれて 水みづの面おも

粉こなの備つづえも 恙つづ無く

あなたの顔かほを 映うつし出す

あの日ひを思おもう ああ、緑り川

(二)

山青やまき 野辺のべの 匂においに 誘いざなわれて

浮うき草くさに住すむ 虫むしたちと

あなたは帰かえる 夏休なつやすみみ

姿探さがした ああ、緑り川

(三)

天高あまく 稲穂いなほ刈かる 魚沼うおぬまに

利鎌とがま 磨みがいて 末すえを 切きり

あなたと背負せおう 黄金こがね束たば

夕食ゆうげの 煙けむり ああ、緑り川

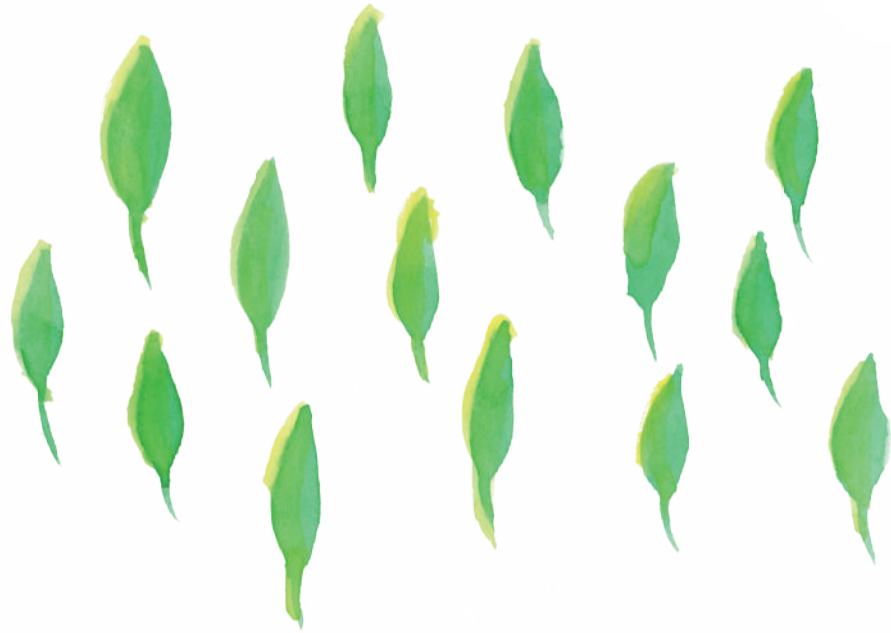
(四)

寒空さかまいとに 酒米さかまいと解といて 鎮まもります

室むろに 納おさめた 麴こむぎ床こ

あなたに手向たむく、 盃さかずきを

待ち侘わび願ねがう ああ、緑り川



【解説】

緑色みどりに澄すんだ上等じょうとうの酒さけを、中国ちゆうごくでは「緑酒」という。中華街ちゆうわがわに行くとき 街並まちなみみに紅色にじいろの提灯ちやうちんが下がさがって、賑にぎやかな感じかんじがするものである。この街まちで酒さけを楽たのしみ、食たべ事を楽たのしむ。「紅灯緑酒こうとうりよくしゅ」の所以ゆえんである。

新潟にがたの魚沼うおぬま地方ちほうは雪深ゆきふかい。春はるは未なだ残のこり雪ゆきが多く、雪解ゆきとけの水みづが溢あふれて 魚野川うおのがわに注つぐ。豪雪ごうせつとともに、「こしひかり」で名高ない米こめどころである。

いや、諸兄しよあにも納得のうとくの、銘酒めいしゅの里さとでもあるから、柳都りやうとの芸者げんしやさんの案内あんないで、新潟にがた駅の「ぼん酒館ぼんしゅかん」に行いき給たまえ。五百種いほひつほどの新潟にがたのお酒おさけがワンコインで飲のめるよ。いやいや、五回ごかいまでの「試飲しちんの盃さかずき」ですって。

無料むらうの塩しほと味噌みその備つづえで、きつと追加つぎコインとなるさ。帰かえりは古町ふるまちで ご飯食ごはんべかなあ。

越後えちごの夏なつは緑きりの田園でんえんである。晩春ばんしゆんの魚沼うおぬまの川がわは鮎あゆが捕とれるせいで「魚野川うおのがわ」と云いうのであろう。この緑きりの自然しぜんを想おもひ起おこさせるネーミングが氣きに入いって、今夜こんやは、清酒みどりかわ「緑川きりかわ」にしよう。

お米こめの栽培かいたいは、春はるの苗床なえどこ、夏なつの草取くさとり、秋あきの収穫ととみ、そして酒造さけぞうりだ。まるで、お酒さけは転生輪廻てんせいりんねだ。それに人々ひとびとの生き様いきさまが乗のってゆく。

演歌えんか、「緑の川きりのかわ」の由来ゆらいでもある。

古来こらいより、天皇てんかうは祭祀さいしの長ながとして、農事中心のうじちゆうしんの政まつりごとをなされた。そして、毎年まいねんの神事しんじは酒さけと共に在ある。

更さらなる昔むかし、稲作いなづまは日本にっぽんから朝鮮半島ちゆうせんはんとうを経て大陸諸国たいりくしよこくに広ひろがったのである。